

# Invisible / Visible

【最終章】

パックのオレンジジュースが、ベコ、ベコ、と悲鳴を上げた。梨佳が、突き立てたストローから口を離す。

「ウチの図書館って、あ、新設の方だけだ。あそこさ」

梨佳は学生証入れから、バーコードが印刷されたカードを取り出した。

「機械で読み取ってるよね」

美沙は、購買で買った焼きそばパンを口にしながら頷いた。屋上のベンチに座るその膝の上には、土曜日に借りた本が乗っている。

久々の日差しが、その分厚い表紙に、鈍い光を張り付かせた。

梨佳はその本を手にとると、何度もひっくり返したり、パラパラとめくる。

『私立綾綺学園図書館』

その印字が刻まれているが、管理に使われている磁気コードラベルがどこにもない。代わりに、

『図書カード控え。』

貸し出し日 十月三日（土）

返却期限 十月十日（土）

返却期限は守りましょう』

「これってさ、旧図書館の控えだよな」

「そうだね」

『幻の焼きそばパン』と、購買のメニュー表に書かれているそれを、半ばまで食べ、残りを梨佳に渡した。美沙は少食で全部は食べない。『幻』のそれを買い損ねた生徒達の叫びが聞こえてきそうだ。

梨佳は「サンキュ」といって、口にする。

「みふやのいふも」

「口を空にしなさいよ」

梨佳は、コツン、と自分の頭を小突くと、口をせわしなく動かして、飲み込んでいった。

「表面だけでは世界は見えない。美沙がいつも言ってるそれが、まさに現れたってやつだね」

「あまり驚かないのね」

「この目隠しされた世界が云々言ってた人が、今更何を言うかな。害がないならいいじゃないの」

美沙は、息と共に笑みをこぼした。

「それよ、それ。その笑みこそまさに隠された世界」

梨佳が、ツン、と指を美沙の鼻先で弾かせる。

(梨佳がいて、本当によかった)  
嬉しく思った。

「でもなあ」

梨佳は腕組みして、難しい顔をする。

「なーんで私が予備校の日に、そういうトコに入れたかな」

「じゃあ、梨佳も今日行こうよ。今日は予備校じゃないでしょ？」

梨佳は、子供ののように表情を輝かせた。首を何度もブンブンと振る。

そこに、昼休みの終了を告げるチャイムが響いた。

「放課後が楽しみ、楽しみ♪」

スキップしながら、心底楽しそうに進む親友の後を、美沙は苦笑しながら付いていった。

梨佳は扉をノックした。

美沙は『封印』をジャラジャラといじっていた。

梨佳は手を顎に当ててうなる。

美沙はこの前のイメーヂを浮かべた。

「今日は休館かな」

最初に口を開いたのは梨佳であった。

「そう……かな」

美沙の口調は沈んでいた。

「ゴメンね」

美沙の表情は沈痛を通り越し、今にも泣きそうですらあった。

「何で美沙が謝るの？ 休館なんだから仕方ないでしょ」

「でも……」

美沙が力なくうなだれていると、梨佳は頬を膨らませて、その表情を覗き込んだ。

「ああ、もつとアクティブに考える。アクティブに！ 今日は休館。今度の開館日に来る。オーケー？ ドゥーユーアンダスタン？」

美沙はうなだれたまま。

「よし。じゃあ今日は帰る。ほら、帰る。帰りにケーキでも食べてこ」

梨佳は、美沙の手をつかむと、強引に引っ張って行った。

「本当にゴメン」

「何度も謝らなくてよろしい」

「今度、司書さんに会えたら、写真でも撮ってくる」

それを聞いて、梨佳は足を止めた。振り返ったその顔は、本当に怒っていた。

「美沙。それ、美沙の信条に反してるよ。そんなことしたら、私は、世界を表面しか見れない人間になっちゃうじゃない！ だからダメ。絶対ダメ！ そんなことした

ら、私も美沙も傷つくよ。……だから、私は自分で見る。この目で見ると。だから、そんなこと言っちゃダメだよ」  
切れ長の美沙の目から、涙が落ちてきた。ぬぐうが、止まらない。ヒック、ヒック、としやくり上げる。

「ゴ、ゴメ……ン。ほ……ん……当に。……あ、りがとう」

「ほら、泣かない。謝らない。もう」

梨佳はそう言って、目尻をぬぐった。

「私まで泣いちゃうじゃない」

「梨佳……には、この、体験。共……有、して、ほ、しく……て」

梨佳は、泣くのをこらえて震える体を押さえて、美沙の手を握り締め、言った。

「ありがとう」

「美沙、今日も《図書館》行くんでしょ？」

二人は傘を差して旧図書館の脇道を歩いていた。昨日の空模様が嘘のように、今日は灰色一色の空から雨が落ちる。

「いいなあ。私も予備校なければねえ」

梨佳が、傍らの背の高い親友の顔を、見上げる。

顔には緊張が張り付いている。

今日こそは、という期待。

今日も、という不安。

美沙は梨佳に脇腹を肘で軽く突かれた。

「会えるといいわね。でも私が一緒の時のの方がなおいけないね」

「うん。今度は絶対一緒に行こう」

「あつたりまえじゃない。予備校ない日は、毎日付き合わせるからね。じゃ、またね」

梨佳は手を振って、そのまま正門へ向かう。美沙は、旧図書館へと足を向けた。

下校時刻が他のクラスよりも早かったのか、辺りに人影は見当たらなかった。

バス停が、正門側でなく、裏門側の方にあるのも原因であった。もともと、この辺りは交通の便がよくなかった。そのせいで、開発の早かった裏門側の方にバスが通っているのだ。

美沙は、胸の鼓動が激しくなるのを感じながら、扉の前に来た。それを見て、さらに鼓動が激しくなった。

扉に当たった手に力を込めた。

受付には司書がいた。

司書は来館者を認めると、会釈した。美沙もつられて頭を下げた。

受付の前に来た美沙は、鞆から本を取り出した。

「ありがとうございました」

そう言って、司書に渡す。受け取った司書は、手元の貸し出しカード入れから、その本のカードを取り出し、『返却済』の印を押して、『返却図書』と書かれた箱に入れた。

「一人で全部管理してるんですか？」

司書は大きな目をさらに見開いた。何かの感情を表すときの癖なのかもしれないと、美沙は思った。

「まあ、最近は図書館に来る人も少ないですから、一人で十分ですよ」

「でも、大変でしょう？」

顔を覗き込まれた司書は、胸の前で翼を組む。

「なら、私が手伝いますか？」

「と、言われても、私の仕事ですしね」

司書は、無表情だが困っているらしく、視線は天井の方をさまよっている。

美沙は、じつ、と司書を見据えていた。

「んー、では、虫干しを手伝ってもらえますか？」

今日はいい日和ですからね、と言いながら椅子から立ち上がる司書。足が短いためか、その視線が少し下に落ちる。それでも、百七十センチを越す美沙の身の丈よりも、高かった。

美沙は見上げてポツリと一言。

「むっくりしてますね」

言ってから、慌てて手を振り言い直す。

「あの、温かみがあるというかなんというか」

「そうですか？」

美沙は首を縦に振る。司書は気にしないようだ。

司書は背を向け、受付後ろの階段前で立ち止まる。

頭だけを美沙に向けて、翼で指し示しながら、

「この階段を上がっていくと屋上に出られます。本は箱

ごと上げてありますので」

そして跳ねるようにして階段を上っていった。

屋上は、温かな日差しだけでなく、心地良い風も流れていた。

「すごい……」

美沙の口から、自然とその言葉は漏れた。

二階建ての図書館の屋上。そこから見えるのは、学園

のキャンパスでも、開発された住宅地でもなかった。

木、木、木、また木。どこもかしこも緑と紅葉のコントラスト。

見渡す限りの森の中にここは存在しているのだ。

「森の香りだ」

美沙は目をつぶって、大きく息を吸い込んだ。森林の空気で胸を満たすと、そのまま横になりたい気分になった。

「気持ちいいでしょう。だからいつも作業がはかどらないんですがね」

司書も翼を広げ、空気を吸い込んだ。

「あ、いけない。手伝いに来たのに」

慌ててそう言う美沙の前で、司書は翼をバタバタさせた。

「あ、いや。そういう意味ではないです。休んでいてもいいんですよ」

「え、でも」

「このよさが分かっていたただけで、私は嬉しいのです」

司書は言いながら、本を取り出し、パラパラとめくって、風を通す。

美沙も箱の中の本を取り出して、それに続いた。しばらくの間、

パラパラ、という本をめくる音。

さわさわ、という森がそよぐ音。

それが空間を支配した。

どれほどの間、そうしていたのだろう。

美沙は手をかざし、空を見上げた。

日は依然として高い。

ここは悠久の中、温かい日差しと森の香りに包まれているのだろうか、世界が調和しているとはこんな感じかもしれない。全ての存在が満たされている、そんな空間。

(いや、違う)

ここは昔の綾縞？ だとしたら、この光景は。

そう美沙が考えた時、心を読んだかのように司書が応えた。

「我々は痛みを感じます。人と同じです」

それに応えるように、風が吹き抜け、森がざわめき、

本が一気にめくれていった。

「森も本達も、みんな心を持ってます。痛いと思います」

司書は、虫干しした中から、一冊の分厚い本を取り上

げた。それを美沙の前に差し出す。

「あなたは、その言葉が聞こえていたのだと思います。

全てを見ようとするからこそ、私達が見えたのでしょうか」

呆然としている美沙の手に、司書は本を持たせた。

「これは、この大地が見る夢。でも、夢は世界に存在す

るものが見るものです。私たちは」

司書が言葉を区切る。美沙は、言い知れぬ不安に駆ら

れ始めた。

この世界から出される不安。

この世界が消える不安。

自分の安定が泡沫の夢になる不安。

夢見る存在が消えてしまう不安。

「ま、待つてよ。お願いだから」

「私たちはすでに、そしてこれから」

「止めて！ 聞きたくない！」

美沙は耳を塞いで、絶叫した。

しかし、その言葉は直接頭の中に響いてきた。

「消える存在なのです」

空は曇り始め、木々は消え、コンクリートの灰色が広がり始める。

「お願いだから、私からこの場所まで取り上げないで。

表面ばかりの、偽物の世界はイヤ！」

司書は、美沙の肩を叩いて、ハンカチを差し出した。

「泣かないで下さい。これを貸しますから」

美沙は、はっとして司書を見上げた。すでにその姿は薄らいできている。

美沙は、司書が消えるその間に声を絞り出した。

「返しに来ますからね」

直後、美沙は旧図書館の前にへたり込んでいた。

その傍らには、厚手の書籍。手にはハンカチが握られていた。

旧図書館の扉は封印されていた。激しくなった雨が強い風とともに吹きつける。

美沙は、その場で泣き続けた。

家の呼び鈴が聞こえる。恭介が「はい」と返事して、玄関へ向かう足音が聞こえた。

身体がだるく、いうことを利かない。そして、動かす気も起きなかった。

その内、階下で「あ、梨佳姉ちゃん。お見舞い？ 上がってよ。姉ちゃん部屋にいるからさ。喜ぶと思うよ」

「相変わらず姉さん思いね、恭介君」「ちよっと、梨佳姉ちゃん」

(梨佳、また恭介からかかってる)

美沙はそう思うと、暗く沈んでいるはずなのに、笑いそうになった自分を感じた。

コンコン、ノックの音。「おじゃまします」というと同時に部屋に入る梨佳。

美沙が半身を起こそうとすると、それを押さえて、額に手を当て、自分の額と比べる。

「ひどい熱」

「三十九度二分……だって」

「昨日の雨に打たれてたんでしょ。突然、台風みたいになったからね。あれに打たれりゃ、そりゃあダウンするよ、美沙」

梨佳は、黙りこくった美沙の態度にいつもと違うものを感じてか、眉をひそめた。

「昨日、あれから何があったの？」

美沙は、梨佳の視線が枕元の書籍に向くのに気づき、手を伸ばそうとしたが、梨佳の手がそれを取り上げた。

バラバラ、とめくった梨佳は、合点がいった、といっ

た表情でそれを戻した。

「入れたんだね」

美沙は布団で顔を半ば隠すようにしながら、小さく頷いた。

「説明してくれる？」

美沙はしばらく目を合わせず、黙っていたが、それは身体のだるさのためだけではなかった。

やがて、重い口を開き、昨日の出来事を要点だけかいつまんで話した。

「返すんでしょ？」

美沙は本に手を伸ばし、抱きこんだ。

「なら、何十年かかっても、見つけなさいよ。それは、彼らの夢かもしれないけど……美沙、あなたの夢でもあるよね」

梨佳は気休めを言う人ではない。それは美沙も十分に分かっていた。

そのような親友だからこそ、存在がありがたく、支えになっっていることを美沙は思い、涙を流した。

電話は突然であった。

翌日になっても、美沙の熱は下がらず、雨の音を聞きながら安静にしていた。

部屋の子機に、弟の恭介がコール。

梨佳よりの電話だった。

『寝てた？ ゴメン！ でも、すぐに、知らせないとして、思ってた』

梨佳の声は切れ切れであった。走っていたのか。慌てているのは間違いないかった。

「落ち着いて」

『落ち着かないわよ！』

梨佳はがなり立てた。受話器から息遣いが遠ざかる。息を整えているのだろう。

『今日に限って、財布も携帯も家に忘れていて、それで知らせるのが遅くなっちゃって』

梨佳は焦るあまりに、その言葉は要領を得ない。

『ゴメンね。美沙、熱出しているのに……じゃなくて、ああ、もう！ だから言いたいのには』

梨佳が一旦言葉を切る。唾を飲み込む音。

『緒方のヤツが言ったのよ！ あの旧図書館が、今日の夕方から取り壊されるって。ええと、今五時だから、もう始まつちやってる！』

美沙は、その容態からは考えられないほどの早さで、飛び起きた。子機が音を立てて落ちる。

『美沙、聞いている、ちよっと』

梨佳の声は、虚しく床に響いていた。

美沙は、呼び止める恭介の声も聞こえず、家を飛び出した。そして、ただひたすら走った。

女っ気の全くない、上下ともブルーのパジャマの上から、手近にあったブレザーコートと羽織り、降りしきる雨の中を、とにかくひた走った。

途中で蹴つまづいて転ぶ、立ち上がろうとするが息は荒い。意識が遠ざかりそうにもなる。

それでも、気力を振り絞って、立ち上がり、また走った。

足取りはおぼつかない。

転ぶたびに、そのまま目を閉じたい衝動に駆られる。

水を吸ったコートはあまりに重い。

息つくたびに咳きこみ、嘔吐感がこみ上げてくる。

学園まで一時間はかかった。

旧図書館へ足をひきずるように進む。そこを囲む木々は、メキメキ、バキバキ、と悲鳴を上げている。

周りには、無数のヘルメットを被った作業着姿。重機も入り込んでいる。彼らの中になんだ、なんだ、とざわめきが巻き起こる。美沙を制止しようと、作業員が近づいてきた。

重機のうち一台は、すでに、整地された道から、旧図書館へとその矛先を向けようとしていた。

ゴゴゴ、という重機の動き出す音は、美沙には悪魔の雄叫びとしか聞こえなかった。

「待って！ 壊さないで！」

美沙は、制止を振り切り重機と旧図書館の間に立ち、両手を広げた。

重機を動かしていた作業員は、信じられないものを見るような目つきで、口を開けている。

どう見ても、病院を抜け出てきたとしか思えない格好の女の子が、両手を広げて重機の前に立ちただかっている。

その光景は、異様であった。作業員達は、その鬼気迫る雰囲気呑まれていた。

が、すぐに目の前の出来事を、現実として認識した。

「どきなさい！ 危ないぞ！」

重機に乗った作業員が叫ぶと、周りの作業員が美沙に駆け寄って、その場から離れさせようとする。

美沙は、作業員達が驚くほどの力で、その手を振り払った。

「お願い、壊さないで！ この建物のどこに壊す必要があるの？ この建物の何が悪いの？ 何で？ 何で壊しちゃうのよ！」

美沙の声は、思いの外よく響き、作業員達は驚かされた。

「早くつまみ出せ！」



重機の後方のテントから、責任者と思われる男が、拡声器で作業員達を怒鳴りつけた。

「やめて、離してよ」

美沙は再び作業員達を振り払おうとするが、視界が回った。

そして、そのまま意識を失った。

美沙が目を覚ましたのは、病院のベッドの上であった。半身を起こそうとすると、恭介が静かに寝息を立てていた。

「あ、気がついた」

恭介の脇には、梨佳が椅子に腰掛けていた。読んでいた文庫を閉じ、立ち上がって頭を下げる。

「私のせいだね。ゴメン。……肺炎の一步手前だったって」

美沙は、その言葉がひどく遠いものに感じた。心にボツカリと穴が開いた感じがした。

「あの図書館なんだけどさ」

顔を上げた梨佳は、複雑な表情をしていた。

「多分、美沙のおかげだね。って、けしかける形になった私が言うのも、その、なんだけど」

梨佳は口ごもった後、美沙の手を握って言った。

「新しく作られる市の公園。あそこに小さな図書館を併

設するって話があったらしいの」

美沙は、目を瞬かせながら、梨佳と視線を合わせた。何を言われたのか分からない。

しかし梨佳の表情は、心底嬉しそうであった。

「で、昨日の現場に学園の理事長……えーと」

「高島？」

「そう、その理事長がいたらしくって、美沙の行動に感激したとかで、あの図書館を移築することにしたらしいのよ」

美沙は、まだ普段の調子を取り戻せていない思考の中で、梨佳の言葉を反芻した。

（何？ 移築……それって）

「ほら、理事長って元々政治家じゃん。結構、市にも影響力あるらしいしさあ。でもさ、これで行けるんだよ、あそこに。返しに行けるんだよ。それに私も」

興奮して語る梨佳。しかし、それはもはや聞こえていない。

（大丈夫。あそこはまだある。確かにあるんだ）

美沙は、涙が落ちるとともに、笑みもこぼしている自分に気づいた。

梨佳の口調はさらに熱を帯びだし、病室であることも構わず、「やった、やったよ美沙！」と、大声で喜んでいった。

直後に、看護婦に叱られたのは言うまでもない。

【終幕】

「さーて、今日は私も一緒だからね」

美沙は「図書館」へと向かっていた。隣にはスキップしながら付いてくる梨佳がいる。

美沙は、鞆の中に一冊の本を持っていた。

厚手の書籍である。

そして、ハンカチも。

高校のランドぐらいの広さはある、そこそこに大きい公園の脇に、木造の図書館が併設されている。

日曜日の朝。まだ通る人影はまばらである。

二人は、図書館の前に立った。人の気配はない。外にある看板は初めから気にも留めない。

『開館は十一月十四日（土）より』

綾縞市教育・文化部広報』

二人は、互いに顔を見合わせ、コクリ、と一つ頷いた。

図書館に行くのではない。「図書館」に本とハンカチを返しに行くのだ。それが、司書との約束でもあるからだ。

二人の手が扉に触れる。

手に力を加えた。

そして……そこには。